

圏論によるミニマムな文学モデルについて

—R.バルトを契機に—

大山智徳（放送大学）

1. 目的

本報告の目的は現代数学である圏論(category)によってR.バルト(1915-1980)の文学論について考察を加え、ミニマムな文学モデルを補完構築することにある。

2. 方法

方法はR.バルトの記号論の基礎モデルを現代数学である圏論に翻訳= mapping し、それぞれの射の意味を考えながらR.バルトのミニマムな文学モデルを補完構築する。

3. 結果

圏論に翻訳= mapping されたメタ言語とコノテーションは形式的には(デノテーションはそのままながら)逆射の関係にある。このメタ言語とコノテーションを合成すると形式的なレトリックの体系が圏論により表現できる。

4. 考察

この形式にR.バルトの文学論を翻訳= mapping していくと、作品はメタ言語であり、テキストはコノテーションとなる。さらに射に注目すると作品は線形で有限な文字列(以後、「有限な文字列」と表記する。)と「書く」の合成射。テキストはレクチュールとエクリチュールの合成射となる。そこでは書くの逆射がテキスト以前という意味での未然テキストへ、作品の逆射は読書へと変わり、作品とテキストは逆射の関係にないこと等が帰結される。R.バルトの主張(「作者の死」(1968)、「作品からテキストへ」(1971))は文学の記号形式をメタ言語からコノテーションへと変えようとした主張であることが圏論により可視化された。さらに、レトリックの体系に対応するメタテキストという新しい射に基づく新しい概念も創出できた。最後に、このメタテキストという概念は単にレトリックの体系に対応する射であるだけでなく、エクリチュールとの関係において随伴という圏論の重要な関係を示唆している可能性を含んでいる射であることを指摘しておく。

これにより本報告の目的であるミニマムな文学モデルが補完構築できた。

参考文献

- Barthes, Roland, 1967, *Systeme de la Mode*, Seuil. = 1972 佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房。
—————, 1968, *La mort de l'auteur*, Manteia, V, fin. = 1979 花輪光訳「作者の死」79-89. 『物語の構造分析』みすず書房。
—————, 1971, *De l'oeuvre au texte*, *Revue d'esthetique*, 3 juillet-september. = 1979 花輪光訳「作品からテキストへ」91-105. 『物語の構造分析』みすず書房。
巨明志, 2004, 『記号論と社会学』ハーベスト社。